

## [098] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10168>

---

出版情報：語文研究. 98, 2004-12-28. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

〔会員著書紹介〕

中島あや子 著

『源氏物語の構想と人物造型』

本書は、『源氏物語』の作者である紫式部という人物の、現実体験に基づいた 思惟 が、いかに作品に表出されているのかについて、『紫式部日記』と『紫式部集』の「人物造型」をも対象として総合的に論究した一書である。構成は以下の通りである。

第一章 源氏物語の成立と構想

第一節 紫式部集所載歌の詠作年代について

第二節 源氏物語巻々の執筆年時推論

第三節 源氏物語の成立小攷 葵巻を中心に

第四節 源氏物語の成立小攷 帚木三帖の序跋をめぐって

第五節 蜻蛉巻をめぐって

第二章 紫式部の体験と創作

第一節 紫式部の越前の旅と須磨巻

第二節 未摘花に投影された作者紫式部

第三節 源氏物語にみる親と子 作者の体験と創作

第四節 平安朝前期物語にみる親と子 源氏物語を中心に

第三章 源氏物語の人物造型

第一節 源氏を主導する藤原

第二節 夕顔考

第三節 なにがし院の怪 夕顔巻

第四節 浮舟の形成 還俗問題に至る

第五節 源氏物語の和歌 霞・霧・雲の心象

第一章は、『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』の三作品間の和歌の類似・影響関係と、その先後を検討することによって、『源氏物語』の成立過程、執筆順序の問題について考察を試みたものである。第二章では、紫式部の現実体験とそれに基づく感懐が、『源氏物語』の中に核心的な位置を占めていること、また、そのことが虚構の物語のもつ真实性を確かなものに行っていることを諸方面から論じている。第三章は、女性の登場人物に関する論である。源氏等、周囲の人物の視点ではなく、女性その人の視点に即して描出を掘り下げることによって、女性の登場人物の造型について従来の説の批判をあらためて試みたものである。

（平成一六年一月 笠間書院 A5判 三三五頁 七、五〇〇円）

田中道雄 編

『佐賀県近世史料』第九編第一巻

本書は、現佐賀県域を対象として、近世の俗文芸である、俳諧及び広義の近世小説を収録する。史料集という性格を鑑みて、少ない紙面で贅言を費やさず、全収録作品を紹介したい。

俳諧編「維舟点愚溪ら三吟賦何袖百韻」「西翁・如自両吟ひと時雨百韻」「西翁ら五吟天にあらば百韻」「梅翁ら三吟江戸桜歌仙」「如閑ら三吟剃捨て歌仙」「菊の道」「放鳥集」「元禄十七年西花春帖」「天明二年菊亮春帖」「天明二年其翠春帖」「天明四年其翠春帖」「天明七年其翠春帖」「笠の晴」「向ふやま」「富士の詠」「卯花集」「残夢塚集」「頭陀の旅寐」「笠の露」「夏木立」「羽ぬけ鳥集」「世事の凍解」「常葉の青葉」「年賀集」「うつけみ集」「仰魂集」「誘ふ杜宇」「朝日の神楽」「千代の遊び」「牛あらひ集」「卜心点前句付断簡」「(仮題)月見発句」「斐竹ら三吟賦兀何歌仙」「以左奈宇太」「滑稽堂西花上洛之日記

草子・実録編「竹の林の落葉左衛門」「諸国武道容気 四之巻」「(仮題) 深堀騒動記」「肥ノ逢橋因縁録」(参考資料「笠土居村逢橋由来」「高原市左衛門笠椎滞留記」)「肥前佐賀一尾実記(仇討物)」「肥前佐賀一尾実記(化猫騒動)」「目達原敵討」「須古心中物語」一編舎十九集「伊勢道中不案内記

「年中行事」「七福神評定録」「古今風俗太平記」「薬師ちよんがれ」「田舎狂言幕内外」「六韜三略猫の巻」「老耄雑話」「町々飭評番」「植疱瘡軽安録」「隱家の春」「神々風災順見録」「邯鄲栄花夢」「三法論議集」「当世廿四孝」「おさらば双紙」「反魂二世物語」「異船早魁神評定」「独問答夢物語」「町方盛衰記」「草庵の記

それぞれの作品に田中道雄氏による解題が備わり、中でも全著作を本書に収録した一編舎十九に関しては、全ての作品に頭注が施される。本書を通覧することで、佐賀県域の、引いては近世における地方の俗文学の考察に、種々の知見が与えられよう。

(平成十六年三月 佐賀県立図書館 A5判 一、頁 一一、〇〇〇円)

板坂耀子 著

『動物登場』

古今東西の文学・映画に登場する動物の描かれ方を通して、動物と人間にまつわる様々な問題を考察し、読者に提示する。その思索の足跡は、いずれも意識的に、また愛情を持って動物に接してきた人間にしか抱き得ないものであり、動物との

豊かな交流と、実体験に根ざした皮相的ではない思考が、読者を肯かせる。

考察は、動物から人間へ、人間から動物へと移る。動物と人間の共通性を論じ、差異を述べる。それこそ筆者の意図するところであつて、本書は動物を通して他ならぬ人間を浮き彫りにする。

章立ては次の通り。

第一章 愛する勇氣、別れる勇氣

第二章 野生と自由と束縛と

第三章 鏡のなかの動物たち——擬人化の功罪

第四章 児童文学のなかの母親

第五章 動物好きは人間嫌い？

いずれも動物と人間の、そして文学の本質に迫る内容深いものでありながら、「あとがき」に「授業ノートをもとにした」とあることから察せられるように、語りかけるような筆致と、おそらく筆者の意向を反映したのだから、ソフトラバーという体裁とも相俟つて、肩肘を張らずに読むことができる。

筆者が思索の料とした文学・映画作品は、実一九〇に余る。次から次へと果てしなく続くかに思える広がりがあるが、思いがけない、だが説得力のある主張へと帰結して、引用を貫く非凡な思惟を知る。

(平成十六年四月 弦書房 A5判 一三七頁 一、八  
円)

今井源衛 著

『今井源衛著作集 第七卷』

在原業平と伊勢物語』

本巻は在原業平とその周辺人物についての伝記考証、および『伊勢物語』に関する著書一冊と論文一〇篇を収める。細目は次のとおりである。

在原業平

1 家系と生い立ち

2 青年時代

3 彷徨の一〇年

4 官人業平とその周辺

5 晩年と子供たち

6 その和歌

7 業平伝承の展開とみやび

在原業平関係図 業平略年譜

業平と伊勢物語

在原業平

伊勢物語

伊勢物語一〇一段について

——松尾聰・片桐洋一両氏に答える

伊勢物語の史実をめぐって

伊勢物語の史実

戒仙について——業平から貫之へ

在原業平の兄弟と子供たち

——守平・棟梁・清貫母のこと

大江音人阿保親王子息説をめぐって

伊勢物語六三段と漢文学

伊勢物語の「ゆきゆきて」と文選「古詩一九首」

前半を占める「在原業平」について、後藤康文氏は解説で、「氏は『古今集』や『伊勢物語』といった副次資料の信憑性を慎重に見定め、周辺人物の動向を巧みに織り混ぜつつ、孤独な魂の漂泊者としての在原業平の人生を見事なバランスで描きあげて行く。」と述べる。

後半の「業平と伊勢物語」は、業平およびその周辺人物をめぐる詳細な研究に加え、著者の漢文学に対する造詣の深さを窺わせる、『詩経』や『文選』等の『伊勢物語』への影響を説いた十篇の論考を収める。

本書は、著者が長年にわたって積み重ねてきた、在原業平・伊勢物語に関する研究の全容がほぼ完全に捕捉できるものとなっており、「現時点における業平研究の到達点を示すものであると同時に、今後在原業平について学ぼうとする者の第

一に繙くべき基本文献たること疑う余地はない」(解説)一書である。

(平成十六年六月 笠間書院 A5判 三四〇頁 九、〇〇円)

園田尚弘・若木太一 編

### 『辞書遊歩 長崎で辞書を読む』

本書「はしがき」にあるとおり、近世長崎はまさに「海外交渉の最前線」であった。当然、外国語の習得は必要不可欠であり、さまざまな辞書や学習書の類が編纂されることとなった。本書は、長崎に存在するそれらの辞書類を調査し、報告したものである。

本書は、以下のように、第1部「論文編」第2部「資料編」で構成され、巻末に書名索引を付す。

第1部 論文編

唐話辞書・東京語辞書・朝鮮語辞書 若木 太一

『交隣須知』の朝鮮語部分に関する研究について

劉 卿美

長崎大学附属図書館経済学部分館武藤文庫

(旧長崎高等商業学校)蔵の往来物について

『おらんだ語彙控』について  
勝俣 隆  
池田 幸恵

英語学習黎明期における英語辞書、文法書、学習書について——長崎に関連があるものを中心に——

松田 雅子  
メドハーストの『英和・和英語彙』に関する研究

大崎 明子  
明治初期に現れた独和辞書の研究  
園田 尚弘

『弘郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』について

吉岡 秋義  
日仏語学交流事始 辞書を創った人々  
松藤 英恵

## 第2部 資料編

中国語関係、東京語関係、朝鮮語関係、英語関係、フランス語関係、ドイツ語関係、オランダ語関係、ロシア語関係、ラテン語関係の辞書・学習書、その他の貴重辞書

## 関連辞書・学習書年表

外国語習得のために編纂された語学書の類は、語学研究に不可欠な資料である一方で、時代の潮流・文化の伝播の様子をも示す貴重な文化的財産である。その意味で本書は、語学研究者のみならず、異文化交流という視座からの研究を行う人々にとっても貴重な一助となるであろう。

なお本書は、長崎大学「教育研究改革・改善プロジェクト」

の一環「長崎に保存されている近代黎明期の語学辞書、学習書の調査と研究」の成果である。

(平成十六年七月 九州大学出版会 A5判 二八頁 一、四〇〇円)

## 上野洋二校注

### 『松蔭日記』

五代將軍綱吉の側用人役として、元禄期の幕政を支えた柳沢吉保の生活を、側室正親町町子が記録したもの。全体は三十帖から成り、各帖の題は主として本文中の和歌の中から抜き出すなど、平安朝の日記・物語風の作品を目指したかと推測される。本文も平安朝の語彙・文法を基本とする擬古物語の文体であるが、まぎれもなく元禄期徳川政治・文化の華やかさを描き出す。

文庫本としては五三二頁の大冊であるが、各帖ごとに冒頭に校注者による梗概を備え、末尾に、解説・柳沢吉保略年譜・柳沢吉保家系図・徳川綱吉家系図・正親町家系図を付載する。人名・地名・書名・事項についての索引を、和歌索引と共に収載するなど、全体の関連を理解するための工夫も用意されるので、元禄期の他の文芸・文献との比較対照にも必至。

原書には、原著者あるいはそれに近い人物によると想像される語注が随所に記入されている。本書には、脚注欄に、校注者による注とともに、これらも収められているので、この時代の知識人における古典語理解のレヴェル・内容が、具体的に理解されることも、本書のもたらす恩恵である。多数の登場人物による詠歌作品とともに、これらは元禄期江戸の歌学・古典学が、いかに豊かな質量を保持したかという、貴重な証言になっている。

また、吉保の後半生の一大事業として建設された駒込六義園については、第二十四帖その他に詳述されるが、川崎千厩画「六義園図」(国会図書館蔵)が十二頁に亘って収載され、「六義園十二境」の全体を概観できるようにになっていることも、行届いた心遣いである。

(平成十六年七月 岩波文庫 五三三頁 一、一五五円)

千本英史・今西祐一郎他 校注(千本英史責任編集)

『須磨記・清少納言松島日記・源氏物語雲  
隠六帖』(日本古典偽書叢刊 第二巻)

今春から、「日本古典偽書叢刊」の刊行が始められた。発刊の辞には、

いま、あらためて問おう。これら「偽書」のうちにこそ、

「真正」な著者による書物や言説のみを中核とする思想史あるいは文化史からは見えてこない、歴史の閉塞を切り開くひとつの可能性が孕まれているのではないかと、なぜなら、歴史のうえでどこにもないもの、ありえないものを創出する想像力こそが、これらの「偽書」を成り立たせたのだから。

(伊藤聡・小川豊生・千本英史・深沢徹)

とある。全三巻の収録作品は、

第一巻 和歌古今灌頂巻、玉伝深秘巻(抄)、伊勢物語

髓脳、伊勢所生日本記有識本性仁伝記、伊勢物語見聞書(抄)、長明文字鎖

第二巻 菅家須磨記、清少納言松島日記、山路の露、雲

隠六帖、盛長私記(抄)、阿仏東下り、兼好諸国

物語(抄)

第三巻 私教類聚(逸文)、兵法秘術一卷書、義経百首、

篋篋内伝金烏玉兔集(抄)、篋篋抄(序)、商人の

巻物——秤の本地、河原由来書(抄)

の計二十作品である。

そのうち、第二巻所収の『雲隠六帖』は、『源氏物語』や『蜻蛉日記』の校注を手がけた今西祐一郎氏による校注である。本文に沿って簡潔な脚注・補注が付され、語句の説明や引歌・典故の指摘がなされる。また、底本の無刊記版本には錯簡をはじめ種々の文意不通箇所があるが、異本を参照の上、

適切な本文校訂がなされている。いまだ校注書のなかったこの物語の研究が、本書によって大きく前進することは疑いない。

月報の、三田村雅子「偽書」の中の源氏物語」は、

こつした偽書のありかたは、源氏物語享受の二つの傾向を象徴しているように思われる。男女のすれ違いの物語をどこまでもきめ細かく追究しようとする女性作者の読み（「山路の露」と、権力者の権威の源泉としてのあるべき源氏像をどこまでも追究しようという男性作者の読み（雲隠六帖）との、引き裂かれた二つの方向である。と述べる。「擬古物語」、「中世王朝物語」といった物語群に名を連ねていた『雲隠六帖』は、新たに「偽書」の括りの中に収められることになった。

（平成十六年八月 現代思潮新社 B6判 二九六頁 三、八〇〇円）

『パンテオン会雑誌』研究会編

『パリ一九〇〇年 日本人留學生の交遊』

『パンテオン会雑誌』資料と研究』

本書は、一九〇〇年のパリに留学していた日本人仲間によ

る『パンテオン会』の、自筆回覧雑誌『パンテオン会雑誌』全三冊を影印・翻刻し、それに詳細な解題と論文、研究資料を付したものである。目次は以下の通り。

雑誌本文

パンテオン会書誌ノート

翻印

解題

影印

論文

オテル・スフロート『パンテオン会雑誌』 森本 悦子

中村不折『巴里の下宿屋』 今橋映子・合山林太郎

『パンテオン会雑誌』の位相 今橋 映子

パンテオン会の軌跡 手塚恵美子

回覧雑誌の時代 ロバート・キャンベル

「絵画」の自立のかたわらで 山梨絵美子

「男性同盟」としてのパンテオン会 児島 薫

明治期在欧日本人留學生・外交官たちの俳句会をめぐって 合山林太郎

黒田清輝の二度目の渡欧 山梨絵美子

「日本画家」久保田米斎の文才 永井久美子

一九〇〇年日仏文化交差史への新視界 今橋 映子

研究資料

研究資料中の「パンテオン会会員名簿」を開けば、そこに

は、浅井忠・黒田清輝・土井晩翠等、錚々たる名前が並んでいる。日本近代の歴史の中で重要な役割を果たした、これらの若き知性が、遠い異国の地で何を思い、語ったか。そのことが、回覧雑誌という形式の持つ自由な空気を翻刻で味わい、彼らを取巻く当時の環境を論文によって確かめてゆくことで、自然と看取されるようになっていく。付載のCD・ROMにより、雑誌の全頁をカラーで見ることができ、資料の性質に対する配慮が窺われる。

(二〇〇四年九月 ブリュッケ B5判 五八三頁 七、六〇〇円)

佐々木雄爾著

『長明・兼好・芭蕉・鷗外 老年文学の系譜』

副題の「老年文学」という語について、筆者は、「初老期(四十歳前後)以降に執筆され、かつ普遍性を持った老年の情緒・性向・思想などが作品の基調となっている文学を指しており、否定的に取られがちな老衰者の作を意味するものではない、いわば青春文学の対応語のつもりである」と説明し、このような認識は作品の理解を深める上で極めて重要であると指摘している。本書はこの言葉をキーワードに、方丈記・

徒然草・芭蕉及び鷗外の作品が老年文学の性格を有していることを立証し、かつこれらの作品から看取される老年期固有の思想を抽出することを目的としている。構成は以下の通りである。

- 第一章 方丈記 (1)序 (2)無常と自省 (3)隱逸思想 (4)主題(上) (5)主題(中) (6)主題(下) (7)老年の出家 (8)追記

- 第二章 徒然草 (1)序 (2)隱遁の勧め (3)無常観 (4)仏道・自然・芸術 (5)老道 (6)老年の美意識 (7)兼好の性癖 (8)虚無と自適・俗と脱俗 (9)追記

- 第三章 芭蕉 (1)序 (2)野ざらしの旅(上) (3)野ざらしの旅(中) (4)野ざらしの旅(下) (5)死の準備 (6)老後の楽しみ (7)俳道建立 (8)末期の旅(上) (9)末期の旅(中) (10)末期の旅(下) (11)追記

- 第四章 鷗外 (1)少壮期の寡作と老年期の多作 (2)死・墓・年譜 (3)遺言の意味 (4)史伝 (5)追記

国語教育に携わった側として筆者は、本書で扱われる人々の作品が、青少年期に教科書で読まされ、その性格ゆえ違和感を持つただで終わることを批判する。これらが老年文学であるという認識を持つことで違和感が理解につながる可能性があり、また初老期を迎えたときに啓発の書として再び手にするよう享受のあり方を強く推奨すべきだと主張している。そのためにもこの老年文学という視点からの考察は、古典の

名作といわれてきた作品を正しく理解する上で極めて示唆に富むといえよう。

(平成十六年十月 河出書房新社 A5判 三一八頁 二、四一五円)

佐田智明 著

『国語意識史研究』

本書は、これまで著者が行ってきた国語学史の研究をまとめたものである。

方法としては、教長註古今集など中世・近世の歌学資料に見える助詞・助動詞に関する記述を主な手がかりに、本書のテーマである「国語意識」に関する検討がなされている。本書の全体の構成は以下の通り。

第一章 国語学研究史の方法と位置付け

第二章 中世前期における国語意識

第三章 中世後期における国語意識

第四章 近世における国語意識

第五章 中世近世における語の把握の変遷

第六章 国語意識史研究 結語

本書において著者は、「国語意識とはその時代の人々が国

語をどのように意識したかを考えるときの概念である」と定義づけ、その上で「古代人が日本語をどのように受容し、表現しており、それが史的にどのような状態を反映しているかを考えてゆき、それが国語意識をどういう形で形成し、言語観を構築することになるのかということを考察」（本書序文）しておられる。

中世期から近世期にかけての歌学者たちの言語意識を俯瞰できる本書は、国語学史研究において大きな意義を有する一冊である。

(平成十六年十二月 おつふう A5判 三八九頁 一八、九〇〇円)